



TITLE:

金代の物力錢に就て(中)

AUTHOR(S):

小川, 裕人

---

CITATION:

小川, 裕人. 金代の物力錢に就て(中). 東洋史研究 1940, 6(1): 43-60

ISSUE DATE:

1940-12-20

URL:

<https://doi.org/10.14989/145723>

RIGHT:

## 金代の物力錢に就て(中)

小 川 裕 人

### 三、不公平可能とその救済、附謀克戸の推排

所定の物力錢額は固定した數であり、人民の實際の富力は絶えず變易する勢である。物力錢と富力との均衡は年と共に失はれて行くこと見易き理である。この不公平を救済するため金室の探つた方法は略十年に一回の推排であつたこと既述の如くである。

然し納税者が脱税を企てるのは租税一般に於ける通弊であるから頗る多岐にわたり捕捉し難い物力錢の課税標準を公平に推檢することは當局官吏にとつて甚だ困難なりしところであつたらう。高汝礪の上奏(卷一〇七)には

有司惟務速定、不復推究其實云々。

とあつて、この點にも推排が眞實を捕へ難き可能性があつたことは窺はれよう。その事務は頗る繁多で、然

もこれを前冬より翌春に至る農閑期の短時日の間に完成せねばならぬので、官吏が實情をよく檢査する餘裕なく己むを得ず早卒に決定してしまふ結果となつたやうである。斯の如き不公平可能に對する對策も講ぜざるを得なかつた。通檢推排を見ると、泰和二年閏十二月のところには

上以推排時既問人戸浮財物力、而又勘當比次期迫事繁難得其實、勅尙書省定人戸物力隨時推收法、令自今典賣事產者隨業推收、別置標簿、臨時止拘浮財物力以增減之、

とある。典賣された不動産に就てはその物に隨つて推收する原則は承安二年既に考へられて居たが、こゝに至つてそれを隨時に物の移動に隨つて推收し、別置せる標簿にこれを載せ、推排の時に臨んでは錢貫等の動

産のみを査収する所謂物力隨時推收の法を定めた。租賦（卷四七）泰和四年九月にも

陳言者謂河間滄州逃戶物力錢至數千貫、而其差發有司止取辦於見戶、民不能堪矣、詔令按察司除地土物力命隨其業、而權止其浮財物力、とあり、通檢推排泰和四年十二月のところにも

上以職官仕於遠方、其家物力有應除而不除者、遂定典賣實業逐時推收、若無浮財營運應除免者、令本家陳告、集坊村人戶推唱、驗實免之、造籍後如無人告一月內以本官文牒推唱定標附于籍、とあり、又泰和五年六月のところにも

簽南京按察司事李革言、近制令人戶推收物力、置簿標題、至通推時、止增新強銷舊弱、庶得其實、今有司奉行滅烈、恐臨時冗併卒難詳審、可定期限立罪以督之、遂令自今年十一月一日令人戶告詣推收標附、至次年二月一日畢、逾期不言者坐罪、且諸處稅務具稅訖房地、每半月具數申報所屬、違者坐以怠慢輕事之罪、仍勅物力既隨業、通推時止令定浮財、

とある。實業隨時推收標簿の整備は甚だ困難で、遂に金室は人民のみならず、當局官吏に對しても、刑罰を

定めてその實現を期したやうである。

又推排に關與する官吏等がその人を得ずして收賄し、胥吏走卒がその姦を逞うする機會もあり、不公平な査定をなす可能性のあるべきこと勿論なるが、これに對しても嚴罰治罪の法が定められて居たやうである。高汝礪傳（卷一〇七）承安元年のところには、

未幾擢爲左諫議大夫、以賦調軍須郡縣有司或不得人造胥走卒利其事、急規取貨賂、深爲民害、建言、自今若因兵調發有犯者、乞權依推排受財法治之、庶使小人有所畏懼、二年六月定制、因軍前差發、受財者一貫以下徒二年、以上三年、十貫處死、從汝礪之言也、とある。當局官吏の不正のみならず、人民の不正も亦少くなかつたやうである。推排の際、本人の申告や地方人の推唱に、或る程度の注意を拂はざるを得なかつたことは既述の如くであるが、その結果強豪有力者が通謀して幸免を策し、新強狡猾者が奸策を運らして、貧乏なるが如く偽り、眞に貧弱者が寡援にして抑屈を受けて過徴されても訴ふるを得ざりし有様で姦弊が頻りに行はれて、物力の均一を欲するも得難き結果に陥つたこともあつた。高汝礪傳承安二年のところには次

の如き彼の上言が見えて居る。

切聞、周制以歲時定民之衆寡、辦物之多少、入其數于小司徒、以施政教以行徵令、三年則天下大比、按爲定法、伏自大定四年通檢前後迄今三十餘年、其間雖兩經推排、其浮財物力憑一時小民之語以爲增減、有司惟務速定不復推究其實、由是豪強有力者符同而幸免、貧弱寡援者抑屈而無訴、況近年以來邊方屢有調發、貧戶益多、如止循例推排、緣去歲條理已行人所通知、恐新強之家預爲請囑、狡猾之人冀望至時同辭推唱、或虛作貧乏、故以產業低價質典、及將財物徙置他所、權止營運如此、姦弊百端、欲望物力均一難矣、欲革斯弊莫若據實通檢、預令有司照勘大定四年條理、嚴立罪賞、截日立限關防禁約、其間有可以輕重者、斟酌行之、去煩碎而就簡易、戒搔擾而事鎮靜、使富者不得以苟避、困者有望於少息、則賦稅易辦、人免不均之患矣、

斯くの如き弊害を除かんとして金室は當局官吏を督勵し、大定四年以來の條理を照勘して罪賞を嚴格にし、飽くまで當局自身が實情を驗して査定せしめんとする方針に出で、告奸の法は却てこれを弊害として避けん

としたやうである。民田括籍に關するものではあるが張萬公傳(卷九五)には

通檢未久、田有定籍、括之必不能盡適足、以增猾吏之敝、長告訐之風二也、

とある。告訐の風を猾吏の敝と同様に不可なるものの一として擧げて居る。金室の物力錢査定方法なる通檢推排に於ける態度は徹頭徹尾特使たる推排使や關係官吏の裁量を重んじ、これを督してその檢實を誤らしめざらんと期したもののやうである。賈益謙(本名守謙)傳(卷一〇六)泰和八年九月のところに

守謙等一十三員、分詣諸路與本路按察司官一員同推排民戶物力、上召見於香閣、諭之曰、朕選卿等隨路推排、除推收外其新強銷乏戶、雖集衆推唱、然銷乏者勿銷不盡、如一戶元物力三百貫、今蠲減二百五十貫猶有不能當、新強者勿添盡量存氣力、如一戶添三百貫而止添二百貫之類、卿等宜各用心、百姓應當賦役、十年之間利害非細、苟不稱所委、治罪當不輕也、とある。金室の推排使の裁量に信賴した態度が窺はれるであらう。

以上の如き經濟的變易や強豪の不正による不公平の



他に旱蝗害や水害等の災禍や戰寇による物力の損耗の場合、隨時物力錢減免の恩典の行はれたことも勿論であつた。水災に際し顧慮された場合としては次の如き記事がある。世宗紀下(卷八)、大定二十六年十二月のところに

丙申上謂宰臣曰、比聞河水泛溢、民罹其害者實產皆空、今復遣官於彼推排何耶、右承張汝霖曰、今推排皆非被災之處、上曰、必隣道也、既隣水而居、豈無驚擾遷避者乎、計其資產豈有餘哉、尙何推排爲、<sup>①)</sup>

とある。又その災害の程度を特に派使して檢せしめた場合もある。通檢推排大定二十九年九月のところに以曹州河溢、遣馬百祿等推排遭墊溺州縣之貧乏者、とあり、翌年四月のところに

尙書戸部言、中都路被水、詔委官推排、比舊減錢五千六百餘貫、

とあつて、右の如き結果が奏上されて居る。推排は全國劃一的に行はんとしたのは既述の如くであるが、地域別による不公平も全く無視されたのではない。氣候寒冷、地味貧弱にして、生活快適ならず隣族の侵寇や戰亂により損害を受け易き邊境地方は、これを特別に

遇した場合がある。通檢推排を見ると、承安二年十月の定制には

止當從實不必敷足元數、邊城被寇之地皆不必推排、とあり、翌三年九月所推十三路の結果が奏された中に除上京、北京、西京無新強增者、餘路計收二十萬二千九十五貫、

とあり、又兵志養兵(卷四四)には承安三年軍須錢賦課のことを記して

驗各路新籍物力、每貫徵錢四貫、西京北京遼東路每貫徵錢二貫、臨瀆全州則免徵、

とある。又章宗紀(卷十一)泰和元年八月のところに詔推排西北京遼東三路人戸物力、

とあつて、この三路だけ特別に推排して居る。更に通檢推排の泰和五年には

以西京北京邊地常罹兵荒、遣使推排之、舊大定二十六年所定三十五萬三千餘貫、遂減爲二十八萬七千餘貫、

とある。

この他金の國運の傾くに随つて物力錢に關する不公平も種々生じた。世宗は國粹主義に立脚して、女真人

愛護の政策を堅持したが、漢人の生活を壓迫すること  
も極力これを避けんとした（その効果は所期の如くは  
得られなかつたが）。然るに章宗時代に入つては、女  
真人の生活の行き詰りは益々深刻となり、金室も世宗  
時代の如き充分なる漢人保護の政策を持続し得ず、漢  
民の既耕地をも檢括して女真人に與へる等、政府自ら  
漢民の利益侵害となるが如き事も敢てせざるを得ざり  
し上に、一般女真人の中にも冒名増口して餘分の官括  
地を請ふ他に、その軍戸としての優越的地位を利用し  
て民田をも包取するの不正をなすものも出づるに至つ  
た。これがため物力のみを虚抱して税賦を空輸する者  
も出づるに至つた。これに對しても金室は對策を講ぜ  
ざるを得なかつた。食貨志田制（卷四七）には

（泰和四年九月）上聞六路括地時、其間屯田軍戸多冒  
名增口以請官地、及包取民田、而民有空輸税賦虚抱  
物力者、應詔陳言人多論之、五年二月尙書省奏、若  
復遣官分往追照案憑、訟言紛紛何時已乎、遂令虚抱  
税石已輸送入官者、命於稅内每歲續刻之、

とある。又金國も末運に陥つては、國內に戰爭頻りに  
行はれ百姓流亡し又戰費等による財政膨脹し、軍須等

物力錢の附加的課徴も激増したるため、課賦を免れん  
として逃亡する民戸も非常に多くなつた。食貨志戸口  
（卷四六）泰和七年六月には

勅中物力戸、有役則多逃避、有司令以次戸代之、事  
畢則復業、以致大損不逃之戸、令省臣詳議、宰臣奏、  
舊制太輕、遂命課役全戸逃者徒二年、賞告者錢五  
萬、先逃者百日内自首免罪、如實銷乏者内從御史  
臺、外從按察司、體究免之、

とある。地方有司は所要の課役を逃亡せざる見戸にこ  
れを割り當てるのを常としたやうであるから、逃亡も  
なし得ざる如き下物力戸の負擔は甚だ過大となつたの  
である。こゝに於て金室は賞罰令を定めて逃戸復歸の  
策を講ぜざるを得なかつたやうである。租賦（卷四七）  
興定元年十一月のところには

上曰、聞百姓多逃而逋賦皆抑配見戸、人何以堪、軍  
儲既足、宜悉除免、今又添軍須錢大多、亡者詎肯復  
業乎、遂命行部官閱實免之、已代納者給以恩例、或  
除它役、仍減桑皮故紙錢四之一、三年令逃戸復業者  
但輸本租、餘差役一切皆免、如復戸有司失信擅科者  
以違制論、

とある。

又漢民私有の田地が一般田税を課せられた上に、物力錢の課税標準の中にも加へられるので、この不公平過重を救済せんとして、明昌元年に至り、この種の土地に關し、物力十分の一を減じたことは既述の如くである。

今金代に於ける田地の租稅率を一瞥しよう。金史食貨志(卷四)租賦序のところにほ

金制官地輪租、私田輪稅、租之制不傳、大率分田之等爲九而差次之、夏稅畝取三合、秋稅畝取五升、又納結一束、束十有五斤、夏稅六月止八月、秋稅十月止十二月、爲初中末三限、州三百里外紓其期一月、屯田戶佃官地者有司移猛安謀克督之、泰和五年章宗諭宰臣曰、十月民獲未畢、遽令納稅可乎、改秋稅限十一月爲初、中都西京北京上京遼東臨潢陝西地寒、稼穡遲熟、夏稅限以七月爲初、凡輪送粟麥三百里外石減五升以上、每三百里遞減五升、粟折結百稱者百里內減三稱、二百里減五稱、不及三百里減八稱、三百里及輪本色藁草各減十稱、とある。土地に九等あつてその等級により稅率に相違

ありその輸送里程の遠近によつて減額があつた。又時代によつても多少の變更があつたやうであるから精確な稅率はこれを知り難いが、右の記事は大體標準的なものを傳へて居るのであらう。これによると民佃官地の租と人民私有地の稅とは全く別で、租の制は傳はらないが、稅は每畝、夏稅は三合、秋稅は五升で、その他に結一束を納めることゝなつて居たから毎年の稅は通計每畝粟五升三合と結一束であつたことゝなる。然らば租はどの位であつたであらうか。右掲の記事にも言つて居る如く金史に直接租の制を徵すべき史料はない。然し章宗紀(卷一二)泰和元年九月のところには更定贍學養仕法、生員給民佃官田人六十畝、歲支粟三十石、國子生人百八畝、歲給以所入、官爲掌其數、とあり、又選舉志一(卷五一)策論進士興定五年のところには

上賜進士幹勅業德等二十八人及第、上覽程文恠其數少、以問宰臣、對曰、大定制隨處設學、諸謀克貢三人或二人爲生員、贍以錢米、至泰和中人例授地六十畝、所給既優、故學者多、今京師雖存府學、而月給通五十貫而已……………

以謀克內不隸軍籍者爲學生、人界地四十畝、漢學生在京者亦乞同此……………

とある。右の二記事を参照して考へると、泰和元年に更定された贍學養仕法に於て一生員に賜與する民佃官地六十畝の租入は年に粟三十石に相當したと見てよいやうである。即ち當時標準的な民佃官地の租は毎畝粟五斗位であつたのであらう。續文獻通考の編者もこの點に着眼し

謹案、金之官田租制雖不傳、以泰和元年學田之數考之、生員給民佃官田六十畝、歲支粟三十石、則畝徵五斗矣、雖地之高下肥瘠不同租宜有別、然視民田五升三合草一束之數、必倍徙過之、是亦官田租量之一徵也、

と言つて居る。

金國の標準的な租稅率は民佃官地の租は毎畝五斗、私田の税は毎畝五升三合位で、税は租の約十分の一強位であつたのであらう。魏子平傳(卷八九)には

上問子平曰、古者稅什一而民足、今百一而民不足何也、子平對曰、什一取其公田之入、今無公田而稅其私田、爲法不同、古有一易再易之田、中田一年荒而

不種、下田二年荒而不種、今乃一切與上田均稅之、此民所以困也、

とある。當時漢人政治家に私田百一の稅率が、公田什一の率と比して妥當と信ぜられて居たとすれば、漢人社會の傳統に基いて決定されたと推せられる金代の税と租の比率が大體十と一の割合であつたとしても不合理ではなからう。斯くの如く官地租佃に比し私田の稅率が低かつたので私田のみが物力錢の課稅標準に加へられたとしても不合理ではなかつたのであらう。これに就て物力十分の二を減じたのは農民愛護(商人等に比し)の政策の現れであるかも知れぬ。

次に猛安謀克戸の土地に就て考へると、彼等が官田を耕作した時は、漢民と等しく租を納めたことは勿論であらう。その私有地とも言ふべきものには官より分賜されたものと種々の方法により自ら占有したものとがあるやうである。官よりの分賜は各戸の勞働能力と消費需用額を標示する口數(奴婢口を含む)を計り牛具栽培、漢民租佃や賣買の禁止等、自由處分が制限されるに至り、半官的な土地とも見るべきものであるが、

これには天會三年以後牛具稅（牛頭稅）といふ一種の課徵があつたのである。食貨志（卷四七）牛頭稅には

牛頭稅、即牛具稅、猛安謀克部女直戶所輸之稅也、其制每秉牛三頭爲一具、限民口二十五、受田四頃四畝有奇、歲輸粟大約不過一石、官民占田無過四十具、とある。大體戸口二十五、耕牛三、耒一、田四頃四畝の比例（實際に於てはこれに合せず）を原則とし、耒一具に付き粟一石以下の牛具稅を課された。その率に就てはこの稅創設の天會三年には一般的に一石と定められたが、その後低下せしめられて居る。即ち租賦牛頭稅のところには

（天會）四年詔内地諸路、每牛一具賦粟五斗爲定制、世宗大定元年詔、諸猛安不經遷移者徵牛具稅粟、就命謀克監其倉、虧損則坐之、

とある。天會三年にその年の豐年なるに際し一律に一牛具一石と定めたが、翌年内地即ち上京路謀克戸に於ては一牛具五斗として特別待遇をした。この地方は土地比較的瘠鹵で當時の女真人の農耕技術に於ては牛具の生産力は他の東京等の路に比して少く、且つ内地は當時金室根本の地なりしたため、特にこの地方の女真人

愛護の意味もあつて牛具稅に關しても特別規定を設けたのであらう。

大定元年には牛具稅の課徵範圍は遷徙を経ざる者に限定したやうであるが、當時既に熙宗海陵兩朝を経て女真人の主要部は支那内地に移住し、その遷徙に際しての煩擾や經濟的損失、殊に遷住地に於て分賜された土地も、官豪以外の一般戸の得た土地は瘠惡のもの多いのみならず農耕技術が未熟であり、又生活程度の向上等の諸理由もあつて、實際に貧窮を訴ふる者も多く免稅の必要もあつたのであらう。これより後の記事ではあるが、牛頭稅大定二十一年のところには

世宗謂宰臣曰、前時一歲所收可支三年、比聞今歲山西豐稔、所獲可支三年、此間地一歲所獲不能支半歲、而又牛頭稅粟每牛一頭止令各輸三斗、又多遭懸、此皆遞互隱匿所致、當令盡實輸之、とあり、又同二十六年のところには

尙書省奏、併徵牛頭稅粟、上曰、積壓五年、一旦併徵、民以何堪、其令民隨年輸納、被災者蠲之、貧者俟豐年徵還、

とある。大定二十一年頃は牛頭稅粟は每牛頭三斗であ

つたやうであるが、一牛具は牛三頭の割合で牛一頭に付三斗の税なれば、一牛具は九斗となり、これを天會三年の一牛具一石に比すれば幾分輕減されたのであらうか、國初牛具數を標準としたのが既に牛頭稅を以てこれに代へて居る。これが牛具稅より牛頭稅に名稱變化した理由であらうか、兎に角猛安謀克戸の牛頭稅の滯納は非常に多く、既に當局の問題になつて居たことは明かに知られる。

更に泰和元年に至つて牛頭稅三分一を減じて居る。

章宗紀(卷十二)泰和元年六月のところに、

己亥、用尙書省言、申明舊制、猛安謀克戸、每田四十畝、樹桑一畝、毀木者有禁、鬻地土者有刑、其田多汗萊人戸闕乏、并坐所臨長吏、按察司以時勸督、有故慢者量決罰之、仍減牛頭稅三之一、勅尙書省舉行風俗奢僭之禁、

當時は一般女眞戸の生活難は既に深刻化し、官より強制的に植ゑさせられた桑樹を切り、その土地をも賣る者も現れるに至つたので一面奢侈を禁じ、消費節約を獎勵すると共に他面その負擔する牛具稅をも輕減したのであらう。然しこれでも未だ滯納が多額に上つて居

たのであらう。土地の再給與や換給、牛具や奴婢の補給、土地や奴婢の賣却禁止、勸農自耕の嚴令、臨時の振給、徵兵官給等金室はあらゆる手段によつて貧窮謀克戸の救濟法を講じたが容易にその目的を達することが出来なかつたやうである。徒單公弼傳(卷二二〇)には

是時伐宋軍興、有司督逋租及牛頭稅甚急、公弼奏、軍士從戎民亦疲弊、可緩徵以紓民、朝廷從之、

とある。泰和末の對宋戰の軍費の調達に際し、逋負牛頭稅の督促も問題になつて居たやうである。

斯くの如く猛安謀克戸の納める牛頭稅は國初一牛具一石と定められてから、女眞人の生計貧窮問題と關聯して次第に輕減されたのみで、一石以上を徵されたことは全くなかつたやうである。一牛具一石としても一牛具は前述の如く原則として四頃四畝に比例するから一畝當りとすれば二合五勺となり、これを漢民耕佃官地に比しては勿論、漢民私有稅地に比しても非常な低率である。牛頭稅の率が低廉なりしのみならず、その徵收の目的も全く女眞人自身の救濟の爲めであつた。太宗紀(卷三)天會三年十月には

詔曰、今大有年、無儲蓄則何以備饑饉、其令牛一具賦粟一石、每謀克爲一廩貯之、

とあり、牛頭税のところにも

太宗以歲稔官無儲積無以備饑饉、詔令一耒賦粟一石、每謀克別爲一廩貯之、

とあつて、牛頭税は謀克戸の備荒貯蓄を目的とするもので、各謀克毎に倉廩を設けてこれを貯藏し、前掲牛頭税大定元年の記事の如く處罰令も規定して各謀克にこれを監理せしめ、凶年に際して謀克戸の振給や貸與に資せんとしたのである。紇石烈良弼傳(卷八八)にも上謂良弼曰、猛安謀克牛頭税粟、本以備凶年、凡水旱乏糴處就賑給之、

とあり、世宗も牛頭税が本來振給に用ひらるべきものであることを言明して居る。又百官志(卷五八)百官俸給のところにも

大定二十年詔、猛安謀克俸給、令運司折支銀絹、省臣議、若估粟折支、各路運司儲積多寡不均、宜令依舊支請牛頭税、如遇凶年盡貸與民、其俸則於錢多路府支放錢、少則支銀絹亦未晚也、從之、

とある。他に流用されること必ずしもなしとはしない

が、主として凶年貧窮の振給貸與に用ひられたことは疑なからう。牛頭税の徴収は飽くまで備荒貯蓄の趣意で爲すべきもので、國家財政の收入を目的とするものではなかつたのである。

當時の女真人に對する官田の賜與は戸口(奴婢口を含む)數や牛具數を標準としてこれを行つた。これは身分も顧慮せざるには非ざれど耕作能力を主とし、消費需要額をも考慮した方法なるが、官豪は莫大なる數の奴婢や牛具を擁し、廣大な土地を所有することが可能であつたのである。而してそれが一般謀克戸の貧窮化に關係があつたこと言ふまでもないから、貧窮女真人の經濟的救済とその精神の作興を念願とした世宗が何時までもこれを看過する筈はなかつた。

既掲牛頭税序にも見られる如く、金室は一牛具に付き田四頃四畝の割合として、一家の所有額を四十具に過ぐるを得ざることに規定したが、この制限規定が何時頃より行はれたのか明かではない。牛頭税の大定二十年のところには

定功授世襲謀克、許以親族從行、當給以地者、除牛九具以下全給、十具以上四十具以下者、則於官豪之

家量撥地六具與之、

とある。こゝに四十具以下云々とこれを最高牛具數として居る點より考へて當時既に四十具制限令が存したのではなからうか、然るに同二十三年のところには

有司奏其事、世宗謂左承完顏襄曰、卿家舊止七具、

今定爲四十具、朕始令卿等議此、而卿皆不欲、蓋各

顧其私爾、是後限民口二十五算牛一具、

とある。世宗は戸口二十五に對し一牛具の割合で牛具土地の所有額を四十具に制限せんと欲したが、當時の大臣達は多く多額の土地牛具の所有者なりしたため、その制限令の規定を受くるのを欲しなかつたもののやうである。斯くの如き牛具數に比例した土地が所謂牛頭地であり、牛頭税を負擔すべき土地であつたのであらう。この牛頭地所有額の制限は猛安謀克の物力推排、一般官地檢括と關聯して企てられたことであらう。

右の如き正當なる牛頭税地所有の他に官豪は官權を濫用して官地の冒占、民地の強占や兼併等不正手段により過大な土地を占むる者もあつた。殊に小作制の行はれた漢地に於ては自家の奴婢による耕作能力以上の土地占有が可能なので、この傾向は一層著しかつたや

うである。貧民救済の必要を痛感して居た世宗は漢民強豪の官地冒占民地兼併を抑壓すると共に女眞官豪の土地冒占の弊をも見免さなかつた。彼は既に謀克戸の推排の法の決定した頃これが整理肅正に着手して居る。納合棒年傳(卷八三)には

棒年有宰相才、好推輓士類、然頗營產業、爲子孫慮、冒占西南路官田八百餘頃、大定中括檢田土、百姓陳言、官豪占據官地、貧民不得耕種、溫都思忠子長壽、棒年子猛安參謀合等三十餘家、凡冒占三千餘頃、詔諸家除牛頭税地、各再給十頃、其餘盡賦貧民種佃、世頗以此譏棒年云、

とあり、食貨志二(卷四七)田制の大定二十一年三月のところにも

陳言者言、豪強之家多占奪田者、上曰、前參政納合棒年占地八百頃、又聞山西田亦多爲權要所占、有一家一口至三十頃者、以致小民無田可耕、徙居陰山之惡地、何以自存、其令占官地十頃以上者、皆括籍入官、將均賜貧民、省臣又奏、棒年猛安三合、故太師耨盪溫敦思孫長壽等親屬計七十餘家、所占地三千餘頃、上曰、至秋除牛頭地外、仍各給十頃、餘皆拘



入官、山後招討司所括者當同此也、

とある。強豪、官豪の官地冒占は莫大な面積に及んで居たが、牛頭税地（牛頭地）以外に官豪家にその冒占地の中十頃の占有を許し、それ以上の土地は悉くこれを奪還し貧民に賜與或は租佃せしめたやうである。

斯くの如く女真人官豪は下層女真人や民人の利益を犠牲にして多大の經濟力を得たのみならず、又漢人官吏と等しく宋にも使して多額の贈與を得て居たものがあつたに相違ない。彼等は金國內に於ても經濟的優越者で擔税能力を有すること著しきものと認めねばならぬ。然るに彼等には物力錢を課徴された様子<sup>⑩</sup>は見えないやうである。これは物力錢法は漢人社會に於ける從來の税法や戸等課役法に變改を加へて施行したものに過ぎず、且つこの法の最初に採用された國初に於ては金國は既に奴婢制のみならず、土着制によつて莫大な漢人を包含しては居たが、その國家體制は未だ猛安謀克殊に女真戸が征服者として、特權的地位を占め、原始的な種族皆兵の趣意に基いて武士階級を構成し、主として軍事關係の賦役のみを負擔する謀克戸を主體とした種族階級的色彩のある國防國家的性格を有して居

た。國家の經濟的負擔は主として被征服者たる漢族がこれに當つたのである。されば女真戸に擔税能力はあつても、牛頭税の他に純經濟的賦役の負擔は課されなかつたのも不思議でない。

前述の如き女真強豪の土地所有の制限はこゝに問題とする猛安謀克戸の物力の推排とその趣意を同うするもので世宗の貧窮女真人救濟政策と關聯して企圖されたものなること言ふまでもない。

斯くの如き官豪の不利益となる政策は、強大なる君主權の所有者なる世宗にとつても容易ならぬことであつたらしい。金室君主權の絶對化した世宗の時代と雖もその政治をなすに獨斷專行したのではなく、多く百官大臣達の意見を徴するのが常で、百官大臣の意見がその政治に反影したことと少くない。當時の大臣も國家の大計に立脚した者のみではなく、私利を顧みる者もないではなかつたやうである。世宗は大定十三年頃から猛安謀克戸の推排の必要を感じて居ながら、しばらくこれを實行に移さなかつたのは、舊慣の變改が新強大臣達の全面的賛成を得難きを察したからであらう。

金室君主權の強化に伴うて、曾ては原生的共同體的社會體制に在つて、血統や財産の多寡による貴賤の別はあつても比較的平等觀念の存した女真人の社會に、新に金室の政治力を背景とした官僚階級が成立し、その官權を利用して經濟力をも加ふるに至つて益々社會的地位を確實にし、これが海陵世宗等の變則的地位に際し、官僚にも多く交替があつて、世宗朝に於ては新官僚の擡頭を見たことは周知のことである。金室君主權の強化はこれ等官僚階級の成立やその貴族化に重大關係を有することは言ふまでもない。而してこれ等官僚階級は多く支那内地の土地や漢人社會の經濟的奉仕をその私經濟的基礎とする者で、經濟的に漢人社會に依存した金の國家機構の整備と相應じて成立したものである。斯くの如き金室の發展と微妙な關係のある官僚に對し賢君世宗の慎重ならざるを得ざりしは當然であらう。

然し一般猛安謀克戸の精神を作興し、全女真人主義に基いた新體制の實現を念願した世宗が一般女真人の救済と共に富豪の經濟力に對し何等かの處置を探らざるを得ざりしも亦自然であらう。その方法として世宗

が撰んだのが漢風の戸等による軍事的差役の均衡課賦であつた。

女真人社會は初は低度文化民の常として、血統や財産による貴賤の區別はあつても、事軍役に關しては均一平等なるを原則として居た。海陵の時代に至つても兵役は主として年齢や心身の能力を標準として課され軍馬等の徵發にも財産的差等はあまり嚴格でなかつたやうである。然るに世宗朝の中期頃に至つては女真人の軍事的賦役にも經濟力が考慮されるに至り、地方の番戍に於ては貧窮者が専らその實役に當り、富者は經濟的負擔をのみすることに定められたこともあつた。これは當時の金國や女真人社會の實情が經濟力の強弱を無視して政治すること不可能となりしにもよるが他面支那的政治思想の影響であることも疑ない。

然しこれもその初に於ては確立した方針もなく農業生産力を顧慮することも少く當局には唯信すべからざる胥吏の言に従つてよい加減に差調するやうな忠賢ならざる者もあつて、甚だ各戸の實際の貧富と均衡を得なかつた。且つ前述の如く漢地に於ける經濟的實情は女真人社會にも、農業經濟に基いた貧富の懸隔益々著

しからしめ、新なる方法により家産を推し、組織的な方法によつて軍役を課賦し、これを實際の經濟力と均衡を得しむることは益々急務と感ぜられるに至つた。

世宗は遂に意を決して大定二十年四月詔を出して百官を集め謀克戸の物力推排の事を議せしめるに至つた。

百官の中にはその推排の對象物件即ち謀克戸の課役標準となすべきものに就て異論があつた。蒲察通傳

(卷九五)には

詔議推排猛安謀克事、大臣皆以爲、止驗見在產業定貧富、依舊科差爲便、

とある。多くの大臣は、新に見在の産業を驗して貧富を定め、科差の標準となすべしとし、舊來の法に據るべきを考へたやうである。こゝに産業といふのが何を意味するか明かでないが通檢推排を見ると

右丞相克寧、平章政事安禮、樞密副使宗尹言、女直人除猛安謀克僕從差使、餘無差役、今不推奴婢孳畜地土數目、止驗產業科差爲便、

とあつて、當時女真人政治家の産業と言つて居たのは奴婢孳畜、地土數目即ち牧畜や農業の生産力を含まざる一般財産を意味したやうである。更に通檢推排には

左丞相守道等言止驗財產多寡、分爲四等置籍以科、庶得均也、

とある。この財産の多寡といふのも蓋し右の産業の意味するところと大差なかつたであらう。右のやうな意見に對し、奴婢、孳畜、地土、牛具をも推排すべしと主張する盡心の大臣もあつた。蒲察通傳には

通言必須通括各謀克人戸物力多寡、則貧富自分、貧富分則版籍定、如有緩急驗籍科差、富者不得隱、貧者不重困、與一例科差者大不侔矣、上是通言謂宰臣曰、議事當如通之盡心也、閱三歲進平章政事、封任國公、

とあつて、蒲察通は物力を驗して課役標準となすべきを主張して居る。この物力といふのも既述の如き漢民に關するものと同じく前述の産業よりは範圍の廣いものであつたことは言ふまでもない。通檢推排には

左丞通、右承道、都點檢襄言、括其奴婢之數則貧富自見、緩急有事科差與一例科差者不同、請俟農隙拘括地土牛具之數、

とある。蒲察通等は先づ所有奴婢の數を括して各戸の大體の貧富を知り農閑期を待つて地土牛具の數を拘括

せんと請うて居る。土地奴婢牛具を含めた物力を標準として課役すべきを考へたのである。彼等は漢地に於ける實情に於て土地奴婢牛具の所有が各戸の富力に重大なる關係があり、これを無視して課役する時は、差役と富力との均衡を失ふること甚しきを熟知したのであらう。世宗も亦この主張に賛成して土地牛具奴婢をも驗して推排することに決定した。通檢推排には

各以所見上聞、上曰、一謀克戸之貧富、謀克豈不知、一猛安所領八謀克一例科差、設如一謀克內有奴婢二三百口者有奴婢一二人者科差與同、豈得平均、正隆興兵時、朕之奴婢萬數、孳畜數千、而不差一人一馬、豈可謂平、朕於庶事未嘗專行、與卿謀之、往年散置契丹戸、安禮極言恐擾動、朕決行之、果得安業、安禮雖盡忠未審長策、其從左承通等所見、拘括推排之、

とある。當時の漢地女眞戸に於ては、土地の所有が各戸の富力に重大關係ある實狀を無視する能はず、これを無視せんとする諸大臣は新強の私利を顧みる者に非ずんば、唐括安禮の如く盡忠なれども長策に審ならざるものであつたのであらう。猛安謀克戸の軍役は當初

は原生的共同體的に種族皆兵の趣意に基いて各戸平等に課されて居たが、この推排を議せられんとした當時は既に貧富によつて差等を附せられて居たやうである。然しその貧富決定の標準となつたものは一般動産であつたが、こゝに至つて孳畜のみならず土地、牛具、奴婢等をも含んだ物力を以てするに至つたのである。女眞社會の貧富の決定、課役標準の査定の方法も漢人社會のものと略同様となつたかの如き觀がある。然し漢人社會に於ては奴婢口が重要視されて居ないのに、猛安謀克戸に於ては前掲左承通や右承道、都點檢襄等の言にも見える如く

括其奴婢之數、則貧富自見、

と言はれる位で、奴婢口數が謀克戸の物力に重大關係があつたやうである。これは漢人社會と女眞人社會との農業生産様式の相違より來るもので、漢人住地には勞働力ありて土地等の勞働手段のない無産大衆が存し小作制が既に支配的様式となつて居たのに、女眞社會に於ては、奴婢農業が未だその原則的農業生産様式とされて居た。然し既述の如く、民佃官地の租は一畝當り五斗といふ多量で、女眞人と雖も漢民に小作せしむ

る場合、これに近い小作料を収め得たと推せられるから、彼等も亦煩瑣な奴婢労働によるよりは、自ら耕作せず坐して多額の小作料を収め得る小作制に走らんとするのは當然であつたらう。然し國粹主義的立場に立つて、女真人精神の作興に努力した世宗は女真人をして自耕を力めしめ、奴婢労働を奨励し、屢々令を出して女真人の小作農業化を抑制せんとした。これが女真人社會の比較的長く奴婢生産に停滯した所以である。

兎に角猛安謀克戸の課役標準は舊來の慣例を破つて土地牛具奴婢等農業生産力の相違に基ける女真人社會の經濟力懸隔の事實に即した物力推排法によつて定められるに至つた。これは後述の如く各戸を上中下の三等級に分けて軍事に關する差役の標準としたのみで、漢人に於けるが如く、物力錢を徴した様子は殆ど見えない。

當時に於ては既に熙宗海陵兩朝を経て天下一家四海平等の支那思想の攝取のみならず漢族社會の經濟的文化的奉仕の重要性も如實に認められて、征服者被征服者の種族的階級觀念は稀薄となり、漢族をも重要な組成員とする國家體制は既に成つては居たが、軍國の大

權は主として女眞族がこれを握り、軍官は勿論行政官も亦樞要なるものは女眞人がこれに補せらるゝのが普通で實際政界に重きを成して居た者の多かつたのみならず、猛安謀克に編成された一般女眞人も軍戸として軍役負擔を使命とし特權的地位を保持して居た。殊に世宗はその國粹的全女眞人主義の立場から右の如き機構の保持存続に力めたやうである。當時の金國に於て謀克戸の物力推排が經濟的奉仕を使命とする漢族社會の物力錢法と別個に企てられたのも不思議とするに足りないであらう。

謀克戸の推排法施行の決定を見たのはこの年（二十年）十二月であつたが、二十二年八月に至つて始めて世宗は詔を發して、耆老を集めて貧富を推し、土地牛具奴婢の數を驗して上中下の三戸等を定むべきを命じ同知大興府事完顏烏里也をして先づ中都路を推せしめ續いて戸部主事按帶等十四人を遣して外官と共に分路推排せしめて居る。その特使を派遣して地方官と共に分路推排せしめたことは漢人に關する物力錢査定の場合と同じである。この推排の完成し結果の奏上されたのは翌年八月であつた。調査項目は猛安、謀克、戸、

總口、正口、奴婢口、田、牛具等に就て各その數を括定して居る。これ等の數が規定の比率に合致しないことは勿論である。

又富者の畜産隱匿による不公平可能にも十分の注意を拂ひ、飽くまで實を驗して貧富を定めんとしたことは勿論である。二十二年のところに、

九月詔母令富者匿隱畜産、貧戸或有不救養馬者、昔海陵時拘括馬畜絕無等級、富者倖免、貧者盡拘入官、大爲不均、今竝覈實貧富造籍有急、即按籍取之、庶幾無不均之弊、

とある。

#### 補註

⑯ 事産は後掲泰和四年十二月の記事の實業と同様、田園、屋舍等の不動産であらう。通檢推排、承安二年冬十月の條の

遂定制已典賣物業止隨物推收

とある物業も蓋し同じであらう。

浮財は藏錮その他の動産を指すのであらう。

⑰ 河渠志(卷二七)大定二十六年冬十月にも同様な記事がある。

又曰、比聞河水泛溢、民罹其害者貨産皆空、今復遣官於被災路分推排何耶、右丞相張汝霖曰、今推排者皆非

被災之處、上曰雖然必其隣道也、既鄰水而居、豈無驚擾遷避者乎、計其貨産豈有餘哉、尙何推排爲、

⑱ 桑樹の栽培に關する一例を擧げると、田制(卷四七)明昌元年六月のところに、

尙書省奏、近制以猛安謀克戸不務栽植桑果、已令每十畝須栽一畝、今乞再下、各路提刑及所屬州縣勸諭民戸、如有不栽及栽之不及十之三、竝以事怠慢輕重科之、詔可、

とある。土地を民に租佃せしむることは原則として許されなかつたことは言ふまでもないが、各戸自耕の段別の最小限度を定め、耕作能力の限度を越えた土地に就ては租佃をも許した。そしてその規定も時によつて變遷がある。土地の賣買の禁は何時頃より存したか明かでないが計口授地して自耕を奨勵し、租佃を抑制した精神から見れば土地の賣買も亦禁止せらるべきであつたらう。章宗紀三(卷一一)泰和元年六月己亥に

以尙書省言、申明舊制、猛安謀克戸每田四十畝、樹桑一畝、毀樹木者有禁、鬻地土者有刑、とある。

⑲ 食貨志(卷四七)租賦序のところに物力錢の課税に就て記し、

凡民之物力所居之宅不預、猛安謀克戸監戸官戸所居外、自置民田宅則預其數、

とあるが、猛安謀克戸の自ら占有した土地、即ち官より賜與された額を越える土地には、物力錢を徴されたと思

る必要はないであらう。この記事は物力錢の課税標準となるものは人民私有の田宅で、その中現住の住宅は控除されたことを言はんとしたもので、特に猛安謀克戸の物力錢に就て言はんとしたのではなからう。

⑳ 唐括安禮が尙書右丞なりし時のこととして彼の傳(卷八八)には

又曰、朕夙夜思念、使太祖皇帝功業不墜傳及萬世、女直人物力不因卿等悉之、因以有益貧窮猛安人數事、詔左司郎中粘割幹特刺使書之百官集議于尙書省、とある。彼が尙書右丞となりしは大定十三年十月である。

㉑ 海陵時代兵役が主として年齢能力を標準として課され、貧富を標準としなかつたこと及び世宗時代に至つてこれに經濟力が顧慮されるに至つたことに就ては拙稿「滿洲民族の所謂還元性とその發展に就て」滿蒙史論叢第二、頁(三六二—三六六)(三八九—三九二)参照。尙兵役以外、の調發に就ては大定二十年四月百官を集めて謀克戸の推排に就て議した時の世宗の言に、

正隆興兵時、朕之奴婢孳畜數千而不差一人一馬、豈謂平、

とあり、又同二十二年九月推排施行の時の詔にも

昔海陵時拘括馬畜絕無等敎、富者倖免、貧者盡拘入官、大爲不均、

とあつて、海陵時代女真人に關する徵發には等級はなかつたやうである。

㉒ 食貨志(卷四七)通檢推排のところには次の如く記されて居る。

(大定)二十年四月上謂宰臣曰、猛安謀克戸富貧差發不均、皆自謀克內科之、暗者惟胥吏之言是從、輕重不一、自窩斡叛後貧富反復、今當籍其夾戸、推其家貲、儻有軍役庶可均出、詔集百官議、

㉓ 通檢推排のところには次の如く記されて居る。

(大定)二十年十二月、上謂宰臣曰、猛安謀克多新強舊弱差役不均、其令推排當自中都路始、至二十二年八月始詔令集耆老、推貧富險土地牛具奴婢之數、分爲上中下三等、以同知大興府事完顏烏里也、先推中都路、續遣戸部主事按帶等十四人與外官同分路推排、

㉔ 世宗紀(卷八)大定二十三年八月乙巳には

括定猛安謀克戸田土牛具、

とある。金史(卷四七)食貨志二、牛頭稅、大定二十三年七月の所には

尙書省復奏其事、上慮版籍歲久貧富不同、猛安謀克又皆年少不練時事、一旦軍興按籍徵之、必有不均之患、乃令驗實推排閱其戸口畜產之數、其以上京二十二路來上、八月尙書省推排定猛安謀克戸口畝牛具之數、とあつて、續いて、一般猛安謀克、在都宗室將軍司、迭刺唐古部五紮戸の三類に分けて、猛安、謀克、戸、總口、正口、奴婢口、田、牛具等の諸項目に就てその數も記されて居る。